

女王のやうに

水野 仙子

私は一つの思い出を持って居ます。それが私の友達のC子さんの事でありながら、C子さんと話をしたり歩いたりする時は、思ひ出しもしないで、いつも、外氣に觸れた手が赤くなつて、はつはつと息でも吹きかけた頃になると——さうですね、それよりもあの、銀座の店々に、クリスマスデコレーションが美しく飾りつけられる時分になると、ふっと浮き上るやうに思ひ出せたりするのです。それが耶蘇降誕祭クリスマスの夜のことであるからなのでせう。

C子さんは賢い人です。才色ともに優れたとでもいひませうか、しかし此言葉は往々、完全無缺といふやうな意味にとられがちですが、その觀念だけは取去つて頂かねばなりません。人間ですもの、それあどつかに缺點けつてんを持つて居ようぢやありませんか。C子さんは美しい容貌と、鮮かな才能とを持つて居ました。操行そかうといふことに就ては、随分彼是かれこれの噂さがありましたけれど、それは、美しく生れたあの人の、當然拂はなければならぬ租税なのだと私は思ひます。下らぬ噂さを立てられまい爲には、百人が百人に娼婦このやうに媚びを呈さなければならぬではありませんかと。

それは随分あの人にも隙すきはありました。所謂浮々としたところもありました。時には自分の才色に矜ほこるやうな傾かたむきも見えました。けれども矜ほこるといふことは、いつも自認することに受ける謗そしりに多いのでした。

今から三年ばかり前のこと。C子さんはその時分二十一になつたばかりですけれど、故郷を逃れ出た罪とあつて、自活の道を求めなければならぬ境遇だったので、さる人の好意で某新聞の婦人記者となりました。けれども女がひとりで自分のパンと、それから生命のやうな美を保存するための衣類とを得なければならぬといふことは、生やさしいことではないのでした。それに、雲雀ひばりのやうな自由な轉まりくりと、鶏さへのやうな雄々しい羽ばたきを、藝術の園はなかなかC子さんの上に許しませんでした。それはC子さんが都に出て來ての第一の失望でした。第一の不平なのでした。勢ひC子さんは自分の容貌の美しさに生きなければなりませんでした。自分の周圍に遠卷に立つ男の一人一人と殖えて來ることを、それによつて自分の美しさを意識することに満足を求めるやうになりました。白粉おしろいの濃さも目に立って來ました。さうして危い未來が一二の人によつて豫言されかけた時——

―丁度その時分のことなんです。

十二月のある日、私はC子さんの附属して居る教會の耶蘇降誕祭に、一緒に行ってみな
いかと誘はれたので、格別信仰を持たない身だけれど、今までも一二度顔を出して教會の
人達の顔を見知ってたのを幸ひ、その日は時間までにちゃんと仕度をしてC子さんを待つ
ことに約束をしました。その時分私は伯母の家に世話になつて居ましたので、妙に遠慮が
ちな私は、外出の折などに目たゞしい身なりをして出るのを大變憚はばつて居ました。

その日、

『待つてらしつて?』と機嫌のいゝ聲と共に私の居間の障子を開けたC子さんを一目みて、
私は思はず目を瞠みはりました。その白粉の濃いのには馴れてましたけれど、一目ではなんだ
か品のわからない二枚重ねに、紋お召めしの被布ひふをはをつて、髪は亂れるほどぐるりを出し
て結つて居ました。ほんに思ひ切つた着こなし、それが又よくうつるのではあるが、この
人の都に出がけを知つて居る私には、つくづく都會みやこといふものゝ人を染める力に驚かれる
のでした。なんの婦人記者位の月給で、どうして世の流行はやりを逐つてゆくことが出来ませう。
決してC子さんの身につけて居たものは、そんな贅澤ちりめんなものぢやなかったのですけれど、
たとひそれが昔氣質の祖母の織り残した縮緬ちりめんの染形そめがたであつても、派手過ぎる色が少し時世じせい
には後おくれて居ても、それがあたりをはらふやうにC子さんを引立たせてみせるのでした。

教會にはすでにもう定きまつた人達が集つて居ました。教會とはいつても、これは某市の教
會から分けられた女の集りであるので、特別に教會堂らしく建てられた家でもなく、一人
の年若い女の牧師が、留守居のやうに信者の一家族と住んで居るのです。そして時々、
十人ばかりの信者がほんの家族的に集つて、某市から出向いて来る外國婦人の宣教師に就
て、聖書の講義を受けてゐるだけのものなものでした。C子さんはその某市に育つた人なの
です。

郊外の高臺あたりに四邊を見晴して居る教會の窓からは、いつになく輝いた灯と、澤山な人の
けはひとが洩れて居ました。その玄關に立つた時、私達は應接係りの信者の笑顔に迎へら
れて、先づ祝ひの言葉を交しました。

『遅いぢやありませんか C子さん!』と、そこへ人を分けて出て來た牧師のSさんが、
いつもの元氣な顔に活々とした表情を見せて、C子さんの手をにぎりました。

そして、

『貴女もよくいらして下さいました。』と、私の手も取つて振りながら、

『今日先生のお話のところですよ。』

私は何故か此時はつとしました。襖のかげから聞える演壇の人の聲が、先刻から私に何かの思ひ出を手繰らせよう手繰らせようとして居ました。それが解けて私はC子さんの爲に胸を躍らせたのでした。私はそつとC子さんの顔を偷み見ましたけれど、格別それに就てなんの感情も窺ふことが出来ませんでした。尤も考へて見れば私の注視を受けるまでもなく、襖のかげの聲が耳に入った刹那に於て、C子さんの胸にはあるものが動いたに違ひないのでした。なんで私のやうに、H先生といふ言葉を聞くまで気付かずに居りませう。私はさう思つて頷きました。

H先生といふのは、某市の教會の若い牧師で、C子さんがまだその故郷に、燃えるやうな少女の胸を抱いて居た頃、初めての接吻を齎したその人なのです。耶蘇降誕祭といふので、多分特にこの支部に派せられたのであつたのでせう。

一時は親と親との交渉にまでなつた仲——目出度納まらうとした結婚談を、われから振り離つやうにして北海の父の任地に伴はれて行つたC子さんは、すでもう夢のやうな戀に目覺めて居たのでした。結婚といふ籠に大事な小鳥を入れようとして、却つてHさんはC子さんを逸してしまひました。執着の餌に頭をふり烈しい愛情の招ぎにも應ぜず、さうして二年を過したことを、私はいつかC子さんから話されて知つて居ました。信仰の厚い、篤實なHさんの人格も、再び小鳥を呼びかへす力がなくて、その時になつて居たのでした。

僅かな信者と、少しばかりの日曜學校生徒を集めた一間のうちに、クリスマスツリーに灯した蠟燭の灯の柳のやうに垂れた金モールや銀モールの光に映じて、様々な趣向を凝らした室内の裝飾を映ゆく照らして居ました。その光りを後にして、小さな卓の前に立つたHさんは、片手をフロックの腰に廻して、片手を上の方に翳しながら、イエスの降誕について靜かに説いて居ました。

そこへ私達は入つて行きました。障子の際に居た二三の見知り越しの婦人が、席を譲つたり黙禮をしたりしましたので、一座の視線はみな私達二人の上に注がれました。殊にC子さんの女王のやうな其時の態度——私は敢へてさう言ひます、十分な驕りを持つて、ある權威を示さうと務めたやうな、女王のやうな態度であつたと——は、少らず一座の人々を驚かせたやうでした。私はそれを心に領いて、C子さんを見かへる目を憚りました。又、演壇の人を見上げる勇氣もありませんでした。

小さな室内暖爐の、優しく紅く燃えて居るのを正面に見まもつて居ると、蠟の灯は時々ヂヽと微かに呟いて、とぼとぼとその光りが瞬きます。Hさんの聲はだんだん強い響き

を持つて来ました。その手が時々胸の前に合つては掌^{たなご}を打ち、或は前の方に遙かにをしのべられて、一語は一語を追つて力が籠^こめられて行きました。その抑揚に聲を落す時には、私は思はずHさんの顔を見上げようと思いました。神の愛を説き、貴方々^{あなたがた}と言葉は借りて居るけれども、それはたゞC子さんたゞひとりの爲めに、その失ひかけた信仰^{きづか}を甦^よらせ、吾が手を遁れてやうやう墮落の淵に近づきつゝ愛人の後姿に、恨みを秘めた氣遣^{きづか}はしの目をそゝいて居るかのやうな悲痛な調子を帯びて私の耳に流れ入るのです。私の左手に、いつまでも女王のやうな態度を保つて居るCさんの胸と、眩^{まぶ}しい光の中に立つて居るHさんの胸との間に、私は、そこに絶えては續く微妙な絲を透視するやうな氣がしました。その顫動^{せんどう}が時には烈しく波打ち、時にはつぎ穂もなく絶えだえになつて顫^{ふる}へました。一座はひっそりとなりました。蠟の灯は瞬きます。光の枝につるされたいろいろな贈物が、風もないのに揺ぐやうにさへ見えました。

やがて、子供達の多く集つた此夜の話としては、少し烈しくむづかしくなりかけたのを詫びながら、Hさんは間もなく演壇を退きました。私達は顔を合せなければなりません。私は一面識のあるHさんの會釋に答へて、黙つて笑顔で首を下げました。その時C子さんも笑顔で——といふよりは、微笑の形を顔につくつて黙禮しました。

讚美歌やら、日曜學校生徒の聖書暗誦やら、いろいろな餘興などが順序に従つて進んで行きました。贈物がされました。そしてお茶の用意に幹事の人達が忙しがって居る時、ふと私の目がHさんの目と行き當つたので、私は止むを得ず少し前に進み出て、

『いつぞやは大變失禮いたしました。』と挨拶をしました。その時私の傍^{そば}には、教會の留守居をしてゐる、増田といふ信者の親子が坐つて居ました。

『いつ出てらしたのでございますの。』

『えゝ、昨夜遅く着きましてね……。』

こんなことを切れぎれに話して居ますと、増田さんのお母さんは、ふと何かを思ひ出したやうに、

『H先生もなんでございますよ。つひ四五日前に御結婚なさいましてねえ』と、私達に言ひました。

私は再びはつとしました。それは私の胸がはつとしたといふよりも、Cさんの胸の響が私に共鳴したのであるかも知れません。

『あら、さうでございましたか。』と、幾分疑問にするやうな調子でいったまゝ、私は暫く二の句がつけませんでした。

『お目出たうございます。』

暫くして私が聲をおとしてかう言った時、C子さんは私の挨拶につれて、少しく會釋するやうにしたまゝきつと口を結んで居ました。私はよいしなことを言ひ出してくれた増田さんのお母さんを、心のうちに怨めしく思ひながら、またと二人の顔を見上げる勇氣を失ひました。

私の友達はその宵中、いつまでもいつまでも女王のやうに取りすまして居ました。

その夜の歸途、私はいつになく友達の黙り込んで居るのを見ました。切れるやうに冷たい風にさからひながら、二人は暗い郊外の道から、ぼつちりとした遠くの赤い灯を目あてに、お互に黙り合つて歩いて行きました。

底本…「水野仙子全集」第三卷

初出…「文章世界」大正二年十一月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年七月十五日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)